

保育学生の自ら学ぶ力を育成する体験的授業の可能性 —「保育内容総合演習」の試み—

新山 順子・関崎 哲

Possibility of Practical Lessons that Train Child Care Students to Learn Voluntarily ;
The Challenge of "Integrated Exercise of Child Care Programs"
Junko NIYAMA and Satoshi SEKIZAKI

Abstract

This is a practical report on lessons for an "Integrated Exercise of Child Care Programs", which is a unique program at our university. The "Integrated Exercise of Child Care Programs" adopts a learning method called the "workshop method", in which students independently plan and carry out activities. This activity was held five times over the last year, and developed an exclusive and unique experimental lesson using a flexible framework in the intensive program during summer vacation.

In recent year, there have been many practical reports on experimental lessons mainly comprised of field works also in terms of researches. These reports include various trials of original lessons and the results in each university and college, which are very useful for creating curriculum and reviewing the contents of the lessons. However, there are few detailed studies describing what students learn through such practices. Therefore, this study also discusses the meaning of learning through practical activities with introspection reports written by the students after their activities as a key as well as organizing and reporting the lesson practices, and reviewing the possibilities of practical lessons in the training of child care workers.

Key Words : "Integrated Exercise of Child Care Programs", practical lessons, the training of child care workers.

1. 目的

本稿は、本学における「保育内容総合演習」の授業に関する実践報告である。本学独自開講科目である「保育内容総合演習」では、学生が主体的に活動を企画し進行する学習方式（ワークショップ方式と呼んでいる）を取っている。この授業は、平成13年度までに5回開講されており、夏季休暇を利用した集中授業であるため自由な枠組みを活かした他校には例を見ないユニークな体験的授業を展開してきた。

保育者養成教育における自発的主体的な体験学習の必要性は従来より指摘されている通りである。特に昨今の学生の直接体験の少なさや生活行動の狭さを克服するためには、「経験を通しての授業が

なされると同時に、学生の自発的なグループ活動や学習を引き出し支えていく」¹⁾ことが重要な課題であると阿部（1998）は指摘する。保育士養成課程新カリキュラムでは、学生の主体的学習能力を伸ばすために「総合演習」という科目が必修化されており、学生が主体的に学ぶ学習の重要性は今後一層喚起されるものと考えられる。²⁾このような動向の中で、本学の試みは、学生が体験を通して自ら学ぶことをめざした1つの先駆的な授業モデルとして提示することができるのではないだろうか。

近年では研究面でも野外活動などを中心とする体験的授業に関する実践研究が幾つか報告されている。これらには、各校独自の様々な授業の試行と成果が報告されており、カリキュラム作成や授業内容の再検討の際に大変参考になる。しかし、その体験で何を学ぶのかという一歩踏み込んだ研究報告は未だ少ない。無闇に体験活動を設定しても意味はない。体験の教育的価値について正しく理解した上で保育者養成にふさわしい体験的授業を追求していかねばならない。そこで、本稿では、授業実践について整理し報告すると共に、学生の事後レポートを手がかりに体験による学びの様相についても考察し保育者養成における体験的授業の可能性を検討する。

なお、本論に入る前に本稿で問題にしている「体験的授業」とは何か、ということをはっきりしておく必要がある。広義には一斉に知識を伝達するスタイルの講義系授業においても学生は何らかの「体験」をするはずである。しかし、本稿ではこのような講義などの一斉に知識を伝授される授業スタイルではなく、学生が自ら参加・活動し直接体験の中で何かを学び合ったり創り合ったりする授業のスタイルを「体験的授業」と呼び報告及び論考を進める。

II. 方法

報告及び論考については、以下のような手順を進める。まず、「保育内容総合演習」の授業の概要を報告する。具体的には、開講の経緯、授業のねらいと特徴、教員の役割の3点について整理をして、その独自性を明らかにする。次に、筆者らが中心的に授業を担当した平成11年度と平成12年度の授業について、活動内容の詳細を報告する。実際の授業の様子や学生の姿が立体的に浮かび上がるように活動の写真等も挟みながら紹介する。最後に、平成11年度の授業受講者が事後に記述したレポートの分析により体験による学びの様相について考察し、体験的授業の可能性について検討を加える。これは、図を用いた数量的な分析と自由記述の質的な分析の両面から論考する。本稿では以上のような手順により、「保育内容総合演習」の試みから保育者養成における体験的授業の可能性について明らかにしていく。

III. 本論

1. 「保育内容総合演習」の概要

(1) 開講の経緯

「保育内容総合演習」は、1・2年生合同の夏季休暇を利用した集中授業である。本学では平成9年度から開講しており、平成13年度までに5回実施されている。実はこの科目は、科目として制定さ

れる前は、野外活動を中心とした行事（「キャンプ」という名称で呼ばれていた）であった。教員との親睦や1年生・2年生の学年を超えての交流が主な目的であった。この「キャンプ」は昭和54年から行事として実施されており、学校行事として長い伝統をもっていたが、平成8年度より授業化していく方針が打ち出された。日常生活における学生の体験の質が変化していること、他科目に学外での直接的な体験活動により学ぶスタイルの授業がない、などが授業化への主な理由である。学生にとっては体験活動ができる希少な機会ととらえて、行事から授業へ移行するにあたって、ねらいや内容なども再考し保育者養成にふさわしい授業スタイルを模索することになった。

（2）授業のねらいと特徴

本学の学生は、保育士資格を取得するために保育内容に関する各論の授業「保育内容・健康」「保育内容・環境」「保育内容・人間関係」「保育内容・言葉」「保育内容・表現」を受講している。「保育内容総合演習」では、これらの授業から得た知識を直接的な体験活動を通して再構築していくことをめざしている。必然的に授業内容は総合的な視点で展開される。

以下にこの授業の特徴をまとめてみよう。授業の進め方は表1に示した。

① ワークショップ方式

この授業では、2日間の学外施設での授業日程を4つの活動枠（ワークショップ）に分けている。活動枠に合わせて受講生も4つのグループに分かれる。1つの活動枠が約2時間で、この2時間の活動内容を学生たちがグループ別に企画する。自分たちが企画した活動については進行も担当する。企画を担当していない他の3つの活動には、参加する。つまり、この授業の受講学生は、1つのワークショップを企画・進行し、他の3つのワークショップには参加して直接的な体験学習をすることになる。相互に参加体験し合う学習方式はこの授業の最も重要な特徴といえる。活動の援助者であり、活動の参加者でもあるということは、必然的に活動に真摯に向かわざるを得ない。学生たちは準備段階から気持ちを入れて準備に取り掛かる。

ワークショップを企画・進行する場合に、概ね次のような事前準備が必要になる。活動内容に関する資料収集、活動内容の決定、活動の援助法の検討、参加者全員に配布する自分たちのワークショップに関する資料作り、必要物品の手配、等である。夏季休暇前で事前準備のための授業時間を多くは取れない。以上の作業を効率よく行っていくためには、役割分担が必要である。グループは1・2年合同で1グループ約20人で組織する。先輩である2年生が手際よく役割分担し作業配分できるかということがグループ同士の事前準備の進度を大きく左右する。異学年合同によるグループ学習の興味深いところである。

② 学習の場を学外施設に設定

ワークショップ方式の体験的授業は学内でも実施可能であるが、「保育内容総合演習」では、民間あるいは公立の学外施設を利用して授業を実施している。希少な体験の機会に、野外での活動を含むダイナミックな体験活動をしてほしいという教員の期待と願いがあるためである。ダイナミックな体験活動を行うためには、屋外・屋内両方の空間の広さや融通性のある時間枠が必要である。過去5年

間に利用した施設は、小豆島、牛窓、福山などの宿泊研修施設である。何れも海や山に隣接した自然に恵まれた施設で、広い敷地と体育館を完備している。施設独自のアクティビティの準備もあるが強制的ではなく、時間枠に縛られないで学生が準備した活動に専念することができる。

その他、学外施設を利用する利点としては、日常から切り離された非日常の空間の中で様々な気づきや発見を促がす、普段の生活では味わえない出来事や意義深いエピソードに遭遇できる、場を変えることで体験がより印象的に心身に記憶される、等があげられるだろう。

③ 活動内容の主体的選択と決定

「保育内容総合演習」では、学生が自分たちのワークショップの活動内容を自分たちで選択し決定する。幅広い保育内容から活動内容を選択する際に、指針となるのがその年のテーマである。テーマは、最初のオリエンテーション時に担当教員によって提示される。平成11年度は「遊びを生み出す環境」、平成12年度は「自然とふれあう保育」、平成13年度は「人・自然・モノ（素材）とかわる」がテーマであった。テーマは、学生の実態や利用施設的环境により年度ごとに違うが、あまり活動を限定しないように大きく設定している。活動を限定しないが方向性は提示するというテーマの設定の仕方である。

活動内容は、最終的に保育内容各論で得た知識の応用や発展的な内容で決定する場合が多い。決定に至るまでには、徹底的なグループ討議と関連する資料の収集がある。「〇〇がやってみたい」という個々の興味・関心から始まり、自らを自己分析しつつ「私たちは（保育士になるものとして）〇〇を体験する必要がある」という一致した結論に落ち着くまでに時間がかかるグループもある。活動内容の決定はその後のすべての作業の進行を左右するので教員も適宜かかわりつつ慎重に決定する必要がある。グループ員全員が納得して進められないと、作業の途中で必ず支障をきたし本当の意味での主体的活動を展開することは難しくなる。

④ 教員の役割

このような授業における教員の役割は、佐藤（1995）のいう「媒介者」という名称が適当であろう。佐藤（1995）は文化の媒介としての学校の再定義を試みる中で、教員の役割を「特定の文化を占有し教える『知識の配達人』の立場から学校（教室）内外の人々と連帯して文化の享受と共有の学びを実現する『文化の媒介者』」³⁾と再定義している。あるいは、授業全体を大きなワークショップととらえれば、ワークショップなどの進行をつかさどる「促進者」という名称も適当である。「促進者」は「人と人とが集う場でお互いのコミュニケーションを円滑に促進し、それぞれの経験や知恵や意欲を上手に引き出しながら、学びや創造活動、時に紛争解決を容易にしていく」⁴⁾（中野；2001）役割である。

この授業での教員の仕事は、全体のタイムスケジュールの作成、テーマの設定、各グループへの資料の提示、活動内容と援助方法へのアドバイス、施設のスタッフとの交渉、施設のアクティビティを利用する場合はその検討、グループが提示してきた活動に必要な物品の手配等、複雑で多層的な内容となる。学生の活動が滞りなく運ぶように内と外への緊密なコミュニケーションは欠かせない。

現在のところこの授業は保育内容担当全教員が担当であるが、実質的には年度始めに指導担当教員2名が選出され企画・指導にあたる。担当交替制のため、担当教員の個性により多彩な企画が展開されるというおもしろさがある反面、反省事項や授業としての課題が翌年に活かされにくいという難点がある。以上のような多層的な仕事内容、個々の教員の専門性、授業の在り方や方向性などを十分考慮して、教員のかかわり方については今後さらに検討が必要であると考えている。

表1. 「保育内容総合演習」の授業の進め方

授業の流れ		主な内容
学 内	①オリエンテーション (授業説明)	担当教員による全体テーマと活動枠の提示、スケジュール等の説明。1年生・2年生合同1グループ20名程度でグループづくりをする。
事 前	②グループ学習 (資料収集・企画・準備)	各グループで自分たちの活動枠で行うワークショップに関連する資料を収集する。それらをもとに内容を決定し、援助方法などを検討する。
学 外	③ワークショップの実施	自分たちのワークショップについては進行を担当し、参加者の援助を行う。他のグループ企画のワークショップには参加する。
事 後	④反省会	各々の活動についてグループ別に反省を行い、全体でも意見交換をする。反省会をふまえて個々にレポートを作成し今後の課題を確認する。

2. 平成11年度・平成12年度の授業報告

平成11年度と平成12年度に学生が企画・進行了した活動を写真と共に具体的に幾つか紹介しよう。平成11年度の授業は、牛窓研修センターカリヨンハウスを利用し平成11年9月に7日・28日に実施、受講人数は1年生44名、2年生42名であった。平成12年度の授業は、福山市自然研修センターを利用し、平成12年9月26日・27日に実施、受講人数は1年生51名、2年生42名であった。全体のタイムスケジュールは表2に示した。

表2. 「保育内容総合演習」タイムスケジュール (学外時)

平成11年度タイムスケジュール(牛窓)		平成12年度タイムスケジュール(福山)	
9/27 1日目		9/26 1日目	
9:00	大学集合	10:00	大学集合
9:30	出発	10:30	出発
11:15	フェリー乗船	12:00	現地着、入所式、昼食
12:00	現地着、入所式、昼食	13:30~16:30	ワークショップ① (フィンガーペイント)
13:30~16:30	ワークショップ① (ウォークラリー)		夕食
18:00	夕食	18:00	ワークショップ② (キャンプファイアー)
19:00~20:30	ワークショップ② (キャンプファイアー)	19:00~20:30	入浴
20:45	入浴・星の観測	21:00	就寝
23:00	就寝	23:00	
-----		-----	
9/28 2日目		9/28 2日目	
7:00	起床	7:00	起床
8:00	朝食	8:00	朝食
8:30	部屋点検、荷物運び出し	8:30	部屋点検、荷物運び出し
9:00~11:30	ワークショップ③ (小運動会)	9:00~11:30	ワークショップ③ (ウォークラリー)
11:30~13:30	ワークショップ④ (野外調理)	11:30~13:30	昼食 ワークショップ④
14:00	現地出発、退所式	14:00	(竹けん玉作り)
15:00	フェリー乗船	15:00	現地出発、退所式
16:45	大学着、解散	16:45	大学着、解散

(1) ウォークラリー

自然にあふれ起伏にとんだ施設内の敷地を存分に利用したウォークラリーを開催した(写真1)。ポイントごとに課題があり、課題をクリアすればポイントが与えられる。課題が手遊びだったり、虫の捕獲であったりするところが保育学生らしい発想である。活動の援助者は、各ポイントで参加者を迎えて課題が楽しく遂行できるように配慮していた。

(2) 浜辺の小運動会

施設の運動場を利用して小運動会を開催した(写真2)。波打ち際まで徒歩1分という距離で海風に吹かれながら気持ちのよい汗を流す。体を動かすことで人や自然と交流するワークショップである。様々な手近な自然物(浜辺の石など)を借りてくる「借り物競争」、学内で準備制作した簡単なパズル式ゲーム、など楽しく工夫を凝らした種目が多く見られた。途中の休憩では、自然物を使った見立て遊びを行い、晩夏の暑い日差しの中で体を動かして少々疲れ気味であった学生たちも自然物の素朴な手触りに癒されたようであった。

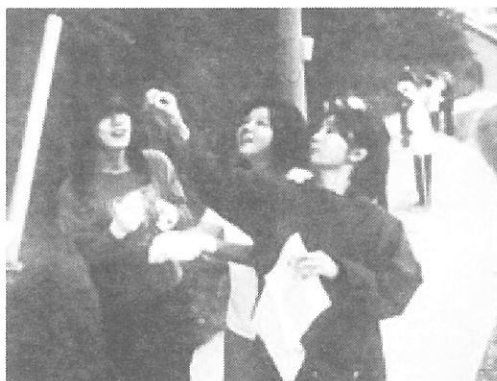


写真1. ウォークラリーの様子



写真2. 浜辺の小運動会の様子

(3) 野外調理

施設のスタッフの協力を得て、野外調理を行った(写真3)。新聞紙や木屑を利用して本格的に火をたきつけるところから始まった。平成11年度の牛窓での活動では、カレーライス、自家製ヨーグルト、缶ピザづくりに挑戦した。特に缶ピザは、大きくて平たいクッキーの空き缶にピザの生地を敷き込んでトッピングをして焼く、という野外調理ならではのダイナミックな料理で学生たちも初めての経験であった。この料理は施設のスタッフに教えていただいた。野外活動に熟練した施設のスタッフのアドバイスを上手に取り入れながら活動を進めていくのも重要なポイントである。

(4) 竹けん玉作り

施設の裏手の竹やぶから竹を準備していただき竹けん玉を作った(写真4)。既成の遊具が一般的である昨今では、自然物を利用した昔の遊具にふれる機会は少ない。本物の竹から遊具を作り出していく作業には集中力が必要である。特に刃物の扱いに慣れていない学生が多く、個々の学生への注意

が必要であった。活動の企画者は、事前に見本品などを幾つか製作しており製作上注意が必要なところを確認していたので、必要に応じて援助に回っていた。

(5) フィンガーペインティング

体育館にシートを敷きこんで、巨大な布地をキャンパスにフィンガーペインティングを行った（写真5）。保育活動でよく取り上げられるフィンガーペインティングだが、ここではグループの協同的な作業として大がかりな製作活動を行った。最初の企画の段階では紙にペインティングすることになっていたが、企画者が事前に試しをしてみたところ紙だと瞬時に色が混ざってしまうので布に描くことになった。製作後はグループで創り上げたフィンガーペインティングにタイトルをつけて鑑賞会も行った。

(6) キャンプファイヤー

夜のワークショップでは、キャンプファイヤーが恒例になっている（写真6）。平成12年度の福山の活動では、ファイヤーのための井桁を組むところから自分たちで準備をした。キャンプファイヤーは、儀式とゲームで構成され、儀式は厳粛にゲームは楽しく、と進行に変化をつけている。学生時代一番の思い出と語る学生も多く、演出に工夫を凝らした儀式、炎の美しさや夜の闇の深さ、友だちとの楽しい交流、などが意義深く印象的なエピソードとしていつまでも記憶に残るようだ。



写真3. 野外調理の様子

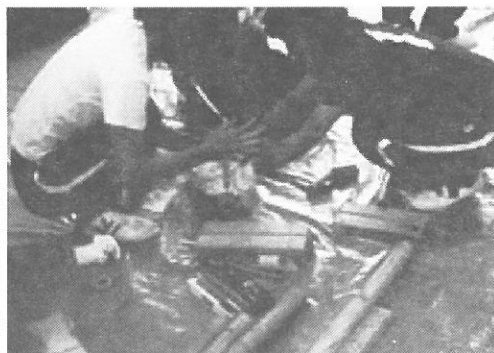


写真4. 竹けん玉作りの様子



写真5. フィンガーペインティン



写真6. キャンプファイヤーの様子

3. 学生の事後レポートの分析と考察

授業後に受講学生に「『保育内容総合演習』で学んだこと」というテーマでレポートを記述させた。レポート記述にあたり、第一に自分たちが企画・進化したワークショップについて、第二に他の班のワークショップに参加して、という2つの視点から記述するよう指示をした。使用した用紙は、大学指定のレポート用紙1枚（B4サイズ）で39行の罫線が有り1行に40字程度記述可能である。自由筆記としたので文量は様々であるが、大体1つの視点について400～600字程度でまとめている学生が多い。今回分析に使用するのは平成11年度の受講学生のもので、提出枚数は1年生44枚、2年生42枚、計86枚である。

レポートは筆者ら教員2名と研究補助員1名で読み、2つの視点別に学生の学びの実感が表現されている部分を抽出し、似た内容のまとまりでカテゴリーに分類した。カテゴリーの分類方法に関しては先行研究⁵⁾を参考にした。分類された記述について、まず量的に分析して全体的な傾向を把握し、次に実際の学生の記述を手がかりに質的な分析をすることで学生の具体的な学びの様相を検討する。

(1) 第一の視点：自分たちが企画したワークショップについて

①学びの実感の全体的傾向

「自分たちが企画したワークショップについて」という第一の視点についての記述からは、学びの実感が表現されている部分として260箇所（1年生125箇所・2年生135箇所）が抽出された。これらを似た内容のまとまりでカテゴリーに分類したところ、以下のような7つのカテゴリー、「反省と課題」「気づきと理解」「創造と工夫」「協力と交流」「喜びと達成感」「感動」「その他」に分けることができた。「反省と課題」は授業における自らの実践の反省事項や課題の記述を取りまとめたカテゴリーである。「気づきと理解」は実践により改めて発見したことや納得や理解を深めた記述を取りまとめたカテゴリーである。「創造と工夫」は実践における創造性や工夫に言及した記述を取りまとめたカテゴリーである。「協力と交流」は友人との協力や異学年の交流についての記述を取りまとめたカテゴリーである。「喜びと達成感」は実践の過程やその後の参加者の反応から喜びや達成感をあらわした記述を取りまとめたカテゴリーである。「感動」は主に作品や自然に関する感動の気持ちの記述を取りまとめたカテゴリーである。以上のカテゴリーにあてはまらないものを「その他」のカテゴリーに取りまとめた。

抽出件数とパーセンテージ（図1）を見てみよう。全体では上位から「反省と課題」132件50.7%、「喜びと達成感」45件17.3%、「協力と交流」40件15.4%、「気づきと理解」20件7.7%、「感動」14件5.4%、「創造と工夫」7件2.7%、「その他」2件0.8%である。自分たちの企画・進行に関する反省事項が半数の割合を占める一方で、喜びや達成感や協力や交流などの実感を得ている学生が多いことがわかる。1年生と2年生を比較してみよう。1年生では「反省と課題」64件47.4%、「喜びと達成感」25件18.5%、「協力と交流」40件17.0%、「気づきと理解」15件11.1%、「感動」6件4.4%、「創造と工夫」2件1.5%、である。2年生では「反省と課題」68件54.4%、「喜びと達成感」20件16.0%、「協力と交流」17件13.6%、「感動」8件6.4%、「創造と工夫」5件4.0%、「気づきと

5件4.0%、「気づきと理解」5件4.0%、「その他」2件1.6%、である。やはり率先して企画・進行を行った2年生の方が反省や課題の割合が高く、実践の結果を真摯に受け止めて振り返っていることが窺える。

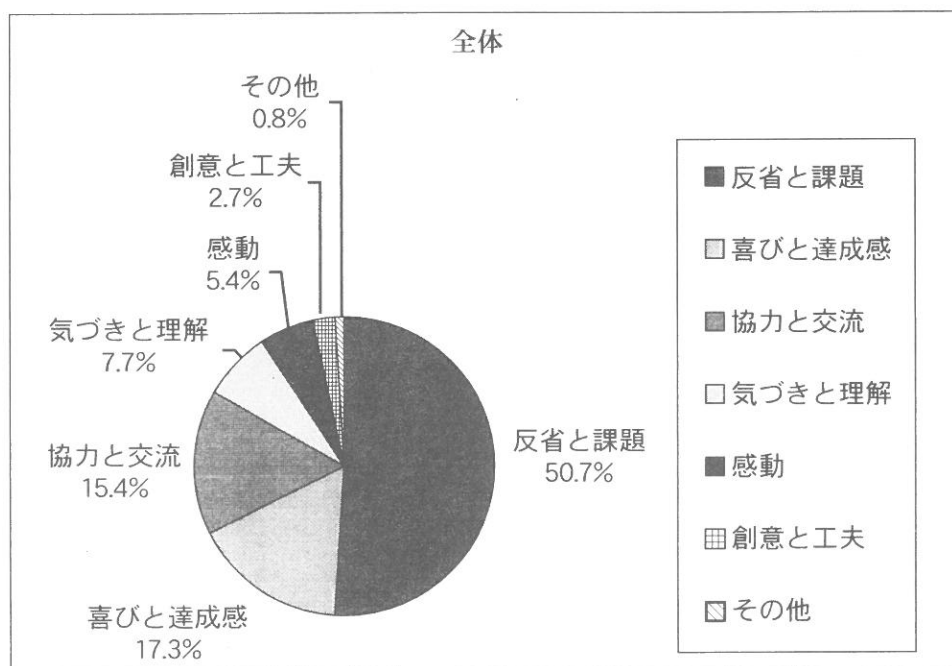


図1. 第一の視点に関する事後レポートの 카테고리分類 (1・2年生全体)

② 具体的な学びの様相

全体のパーセンテージの高い上位4つのカテゴリーについて、実際にカテゴリーを代表する学生の記述を取上げて具体的な学びの様相について検討してみよう。

<「反省と課題」のカテゴリーから>

私は雨の日の運営の係りで当日は晴れだったので係りがなくほとんど2年生が進行してくれました。自分の係りがなかったにせよ、もっと積極的に行動すべきだったと反省しました。2年生に対して甘えの気持ちがあったと思います。(1年生S.Y) /すべてを通していろいろな問題があって大変だったけど、この経験を生かして来年はがんばろうと思う。来年は自分たちがいろいろ考えてしなければならないのでもっと積極的に話し合いに参加していきたい。(1年生T.Y) /わたしは人間知恵の輪のゲームの担当でしたが、慣れない司会とぶっつけ本番のためいろいろ回りに迷惑をかけたように思いました。1回したからといって甘くみていたのかもしれませんが。もっと前もって練習しておけばよかったと思いました。そして臨機応変に対応できるようになりたいと思いました。(2年生U.M) /細かいことなどを連絡しあってなかったため、当日自分の役割でないことはどのように進められるかほとんど知らず協力が不十分であった。また、責任者を決めていなかったのも、企画をし始めたときはまとまりがなく、誰が進めていくのかはっきりしなかった。(2年生O.M)

1年生と2年生では内容に大きな違いがあるのが分かる。1年生は自らのかわり方への反省や来年への意欲を示している。2年生は個々の反省とともにグループ全体の反省や課題を提示しており、打合せ不足、役割確認不足、リーダー不在、進行不十分など提示される事項も詳細である。1年生に比べると実践により主体的にかかわった2年生は自分たちへの問題の指摘が厳しく、客観的具体的な省察を行っている。

＜「喜びと達成感」の 카테고리から＞

自分なりに限られた時間内で自分の役割を精一杯果たすことができたのではないかと思います。どうしてよいかわからないこともありましたが先輩に助言をもらうことでうまくこなすことができたと思います。（1年生I.H）／もう少し時間に余裕があればよかったなと思いましたが、みんなが楽しそうに調理してくれたので本当にうれしかったです。（1年生S.Y）／いろいろなアクシデントに見舞われ次から次へ問題点が出てきてしまったがその一つ一つを何とか乗り越えることができたことが一番印象に残った。（2年生A.M）／直前にアクシデントがあったけれどもそれをSさんの名司会で乗り切ることができました。というのもこれはわたしたち担当班ががんばっただけでなく、私たちにみんながついてきてくれたから成功できたのだと思います。（2年生S.M）／活動中、先生方が「これおもしろいよ」と言ってくれたり、みんなが「楽しかったよ」と言ってくれたので安心しました。（2年生N.S）

自分たちが一生懸命企画・進行したワークショップについて参加者の反応から喜びや達成感を味わっていることがうかがえる。また、特に2年生では当日の予想外のアクシデントやハプニングを自分たちなりに解決したことがより深い達成感へとつながっている。

＜「協力と交流」の 카테고리から＞

先輩方は上手に話し合いを進めたりテキパキとしおりを作成したり1年生に親切にしてくれたので、とても頼りになったし心強かった。準備の中でもこのように協力することは大事だと思った。（1年生S.E）／2回目ぐらいからは先輩に頼まれたことだけだったけれど、1年生みんな協力できたと思う。（1年生T.C）／思うようには進まなかったワークショップでしたが1年生と協力する中で仲良くなれてよかったと思います。（2年生M.T）／自分一人では解決できないことも協力すれば何とかなるということが分かったとともに、月並みだが協力することの大切さを学んだ。（2年生A.M）

1年生と2年生は同じ専攻でありながら、学内の授業ではほとんどふれあうことがない。この授業では、特にグループにおける準備の段階で1年生と2年生が親密に協力し交流し合ったことがわかる。月並みな協力という言葉も実践を通過することで本来の意味を取り戻し生き生きと語られている。

＜「気づきと理解」の 카테고리から＞

キャンプファイヤーの中でのフォークダンスを先輩方が一生懸命教えてください人とかかわることの大切さや楽しさを学んだ気がします。（1年生O.E）／今回初めて裏方に携さわってみて、みんなが楽しく、かつ競い合えるように盛り上げていくことの大変さを実感し、先生たち（幼稚園～高校）の苦労と努力を少し理解できたように思います。（1年生M.N）／見立て遊びが想像以上の出来上が

りで保育士を目指す者として置かれた環境を利用することの大切さを実感した。(2年生T.E) / 保育者の視点から見て、やはり初めて行く土地の環境(安全にどんな遊びができるか)を知っていることは大切なのだなと思いました。(2年生T.S)

自分が学んだことについて深く考察し新たな気づきや理解を導き出している記述である。特に2年生では、保育者としての視点やこの年度の授業テーマであった遊びと環境についてふれている記述もあり学びの質が高いと思われる。

(2) 第二の視点:他の班のワークショップに参加して

① 学びの実感の全体的傾向

「他の班のワークショップに参加して」という第二の視点についての内省記述からは、学びの実感が表現されている部分として319箇所(1年生153箇所・2年生166箇所)が抽出された。第一の視点同様、これらを似た内容のまとまりでカテゴリーに分類したところ、以下のような8つのカテゴリー、「企画・進行の工夫」「楽しさと感動」「協力と交流」「自然とのかかわり」「今後に適用」「気づきと理解」「問題指摘」「その他」に分けることができた。「企画・進行の工夫」は他の班の実践に参加してその企画や進行の工夫している部分に着目した記述を取りまとめた。「楽しさと感動」は活動の中で味わった楽しさや充実感、感動、感激した気持ちの記述を取りまとめた。「自然とのかかわり」は自然とのふれあいやかかわりについての記述を取りまとめた。「今後に適用」はこの授業の体験が保育や今後の自分の生活に活かせるという記述を取りまとめた。「問題指摘」は活動上の問題点を見出し指摘している記述を取りまとめた。「協力と交流」「気づきと理解」「その他」のカテゴリーのまとめ方は第一の視点と同様なので省略する。

抽出件数とパーセンテージ(図2)を見てみよう。全体では、上位から「企画・進行の工夫」81件25.4%、「楽しさと感動」65件20.4%、「気づきと理解」43件13.5%、「問題指摘」39件12.2%、「協力と交流」38件11.9%、「今後に適用」26件8.2%、「自然とのかかわり」24件7.5%、「その他」3件0.9%である。この結果から、学生たちが他の班のワークショップの工夫に学び、楽しさや感動を味わい理解や気づきを深めていることがわかる。1年生と2年生を比較してみよう。1年生では、「楽しさと感動」32件20.9%、「企画・進行の工夫」30件19.6%、「気づきと理解」23件15.0%、「協力と交流」21件13.7%、「自然とのかかわり」17件11.1%、「今後に適用」16件10.5%、「問題指摘」12件7.8%、「その他」2件1.3%、である。2年生では、「企画・進行の工夫」51件30.7%、「楽しさと感動」33件19.9%、「問題指摘」27件16.3%、「気づきと理解」20件12.0%、「協力と交流」17件10.2%、「今後に適用」10件6.0%、「自然とのかかわり」7件4.2%、「その他」3件0.6%、である。2年生では他の班の企画・進行の工夫に学ぶ一方で、活動上の問題も高い割合で指摘されているところが興味深い。

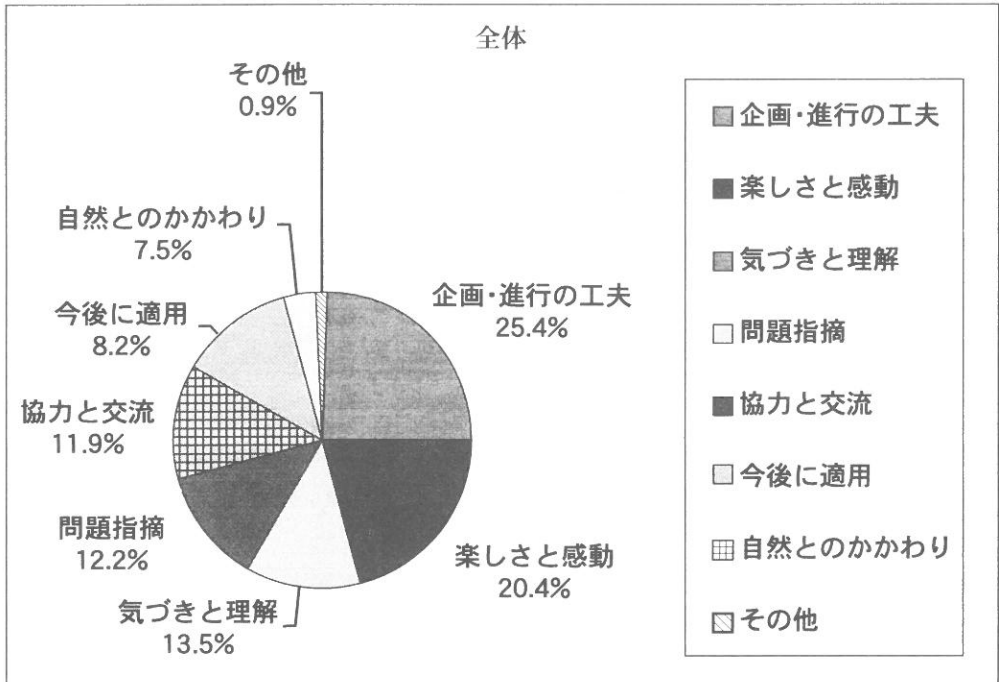


図2. 第二の視点に関する事後レポートのカテゴリー分類（1・2年生全体）

② 具体的な学びの様相

第二の視点についても、全体のパーセンテージの高い上位4つのカテゴリーについて、実際にカテゴリーを代表する学生の記述を取上げて具体的な学びの様相について検討してみよう。

＜「企画・進行の工夫」のカテゴリーから＞

キャンプファイヤーでは、チームに分けるとときにくじを使って動物ごとに鳴き声で仲間を探していくというのはとても工夫がしてあるなと思いました。（1年生S.K）／他の班の活動についてはどの班も牛窓の自然を活かした活動内容で楽しく取り組めるように工夫がされてあったと思います。（1年生M.A）／雨降りの場合の計画を立てていて結局雨が降らなかったのが計画されていた全ての遊びはできなかったが、雨の日の場合も時間があまらないように考えられており役割分担もしっかりしていた。（1年生H.H）／保育士としての感性を磨けるような構成になっていたと思う。特に自然物を使った見立て遊びはなかなか実生活の中で体験できないのでとても良い機会だったと思う。（2年生A.M）／ウォークラリーの班は進行の仕方が上手だと思いました。私は進行していく側に立つとどうしても緊張が出てしまうので見習うべきところがたくさんありました。（2年生K.S）

他の班の活動内容のおもしろさや思いがけない発想、楽しく進めていくための進行上の工夫などがよく記述されている。企画・進行を経験しているので、自分たちの実践と比較しつつ他の班の実践から学ぶことも多かったであろう。

<「楽しさと感動」のカテゴリーから>

自分たちだけでこんなにもできるとは思ってなくて本当に感動した。(1年生N.J) /夜のキャンプファイヤーで前まえから練習していたフォークダンスを火を囲んでみんなで踊ってすごく感動した。

(1年生T.M) /野外調理ではみんなが1つのものを作る楽しさを味わうことができました。(2年生S.M) /2日目の野外調理は最高の思い出になると思った。バーベキューもよかったけどやっぱり自分たちで切って燃やしてを全部するので次回もぜひおすすめしたい活動である。(2年生S.T) /キャンプファイヤーも泊まりの演習だからこそできることで、とても貴重な体験だった。私はトーチ係りだったが初めて体験できた。(2年生N.Y)

キャンプファイヤーや野外調理など、学内では体験できない出来事から楽しさや感動の気持ちを記述している者が多い。また、直接的に教員や大人の手を借りずに自分たちで主体的に行えたことについては大変充実感をもっていることが分かる。

<「気づきと理解」のカテゴリーから>

わたしは保育士としてまだまだ足りないものがある自分に気づかされた。例えば、ラリーのポイントで季節の歌を3つという指令ですぐひらめかず時間がかかってしまった。(1年生HK) /このワークショップで汗をかいてカリヨンハウスの周りを体で知ることが出来た。子どもにも言葉より行動させて楽しみながら学ばせる方がどんなに身につくかということを学んだ。(1年生K.K) /見立て遊びも始めはどうしていいかわからなかったけど、やっていくうちに夢中になり子どもたちの気持ちがわかる気がした。(1年生K.C) /ゲーム時間に待ち時間があり暇になったり他のことをしてしまったりしたことが私の反省点であり問題点だと思いました。(2年生K.H) /どの演習も目的・ねらいに沿ったいい内容だったと思います。学内では学べないことをたくさん学べたと思います。(2年生K.R)

1年生2年生ともに自分自身の問題点の認識や子どもの気持ちの理解など、活動の表面上のことだけでなく自分自身の内面への深い洞察を行っている。ここまでフィードバック出来た者は、この体験から確実に成長しているものと考えられる。

<「問題指摘」のカテゴリーから>

ゲームは他のチームが行っているとき待っている人は退屈になっていたと思う。来年はその辺をもう少し考えてもう少し狭く集まって、待っている人にやっている人の声が届くように工夫した方がよいかもしい。 (1年生O.Y) /アンパンマン体操は初めてだったので先輩を見ながらしたけれどついていけませんでした。まだ、ちゃんと覚えられないうちに終わってしまったのもっとしてほしかったです。(1年生T.C) /キャンプファイヤーでは暗くて説明が分かりにくくどう動いてよいのか分からずにダラダラした空気が流れていることがあったように思います。また、フォークダンスを事前に練習していたのに班の人が曲を忘れてしまい違う曲ですることになりテンポがわかりにくかったです。(2年生W.M) /ウォークラリー後室内で行ったボーナスゲームはウォークラリーでの得点が全く意味のないようだったものに思えて少し残念でした。(2年生O.C)

「問題指摘」は「企画・進行の工夫」と対照をなすカテゴリーである。他の班の実践を客観的にとらえて企画・進行上の問題点を指摘している。こだわりなく問題の指摘ができるのは、自分たちも同じような問題を抱えていたからである。他の班の問題を自らの問題として深く省察し、今後の大学内での学習や保育実践に活かしていくことを期待したい。

IV. 総括

以上見てきたように、「保育内容総合演習」は、学生が自ら参加・活動し直接体験の中から何かを学び合ったり創り合ったりする体験的な授業スタイルを特徴とする。このような授業では、自分たちで実践すること及び他者の実践に参加することで、反省、課題、喜び、達成感、協力、交流、気づき、理解、工夫、楽しさ、感動、問題発見などの学びの実感を得ることが学生の事後レポートの分析より確認された。特に、主体的に課題や問題を発見することに関して多大な学びの可能性を秘めており、体験的授業は保育を学ぶ学生の自ら学ぶ力を育成し伸ばしていくことに有効ではないかと考えられる。

「保育内容総合演習」は今後も引き続き開講される予定であるが、本論でも指摘したように指導担当教員のかかわり方など授業のあり方自体の課題を見直していき、より良い授業に改善していく必要がある。本稿では、「保育内容総合演習」の独自性やそれに参加する学生が積極的に活動する姿を具体的に報告することに配慮したが、紙面の都合もあり活動の様子をとらえた写真等も枚数を限らざるを得なかった。引き続き資料を収集整理し今後の展開を報告できるように研究を進めていく予定である。また、各保育者養成校でも保育学生が意欲を持って主体的に学ぶ姿を大切にしたい体験的授業に関する実践研究が積極的に進められることを期待する。

引用文献

- 1) 阿部明子：「いま保育者養成の課題とは何か」, 森上史朗編『幼児教育への招待』, 161頁, ミネルヴァ書房, 1998年.
- 2) 全国保育士養成協議会・現代保育研究所：『保育士養成課程シラバス第一次案』, 234 - 244頁, 全国保育士養成協議会, 2001年.
- 3) 佐藤学：『学びその死と再生』, 105頁, 太郎次郎社, 1995年.
- 4) 中野民夫：『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』, 146 - 147頁, 岩波新書, 2001年.
- 5) 斎藤一人・嶋崎博嗣・島田茂樹・伊崎純子：「野外体験系宿泊集中授業Field Activity Iの実践報告～2000年の実践と振り返り～」, 『全国保育士養成協議会第40回研究大会研究発表論文集』, 68 - 69頁, 全国保育士養成協議会, 2001年.

参考文献

- 1) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学：『学び合う共同体』，東京大学出版会，1996年.
- 2) 堀建治・加藤陽平・鈴木恒一：「保母養成校における野外活動行事に関する実践報告」，『保母養研究第15号』，63 - 72頁，全国保母養成協議会，1997年.
- 3) 無藤隆：『体験が生きる教室』，金子書房，1994年.

2002年10月31日受付
2002年12月25日受理